

慈父

祖聖をおもふ

桜の花ハラ／＼と散る日、特に私は祖聖親鸞を憶う。

それは真に聖人が御年九歳にして、粟田口なる青蓮院に出家得度せられたる時節だからである。最も華かなるべき時にこそ、覚めたるものは真実に無常を感じるであらう。

実に聖人の出家こそ、久遠なる親を求めて出発せられたのである。

痛ましき我等の現実を厭うて、帰命すべき親を求めて出かける心は、永劫に大自然の故郷をはなれたる流転輪廻の子が、漸く現実の苦に目覚めて、その本国に帰ろうとの微かなる願いに動かされているのである。

澎湃たる現代の思想は、あらゆる方法によつて神々の死を宣言し、あらゆる偶像をその聖壇から打ち倒して、人間の世界の勝利を歌はんとする。これはある意味から言えばいいことでもある。現代人はその論理に於いて祈りを捧ぐべき神々を失つたのである。にもかかわらず、一切群生は限りなき迷妄の淵に沈んで、勝手なる神を迷信し、新たな邪神を建立して、その功利的な願いを満そうとする。功利的祈祷の邪教が如何に一切衆生を迷妄の暗にさそうことよ。我等は単にこの大衆の流れを冷笑し、看過し、又は破壊することが出来るであらうか。我等は単にこの大衆の流れを冷笑し、

まことに現代に於ては、その賢き人たちは拝むべき真実なる神を失い、愚かなる者は限りなき邪神の魔手に亡びようとする。

慈父

現代は実に、唯一の真実なるものを求め、帰命すべき真実を失つたのだ。真実なる生活を失つたのである。こうした時代相を観る時、我等は限りなく祖聖を憶うのである。

「釈迦弥陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

われらが無上の信心を

発起せしめたまいけり。」

げに祖聖は遠く二千年をへだてたる釈尊の上に「慈父」を感得せられたのであった。ああ、大聖釈尊は実に祖聖にとつての「慈父」であったのだ。真実の父を発見すること、それは真実の信に於て同一の生命の流れを感得し、遠劫にも切ることの出来ない一河の流れに於いて、彼と我とを発見することである。

我等は今、祖聖が釈尊を「慈父」と拝したまいしが如く、親鸞聖人を「慈父」として忘れ得ないのである。

私は不幸にして、幾多の先輩、善知識に遭いながら、その求道の大転期にあたって親しく私の手をとりにて、我を叱咤し、我を教導し、我を愛撫してくれる真実の全善知識を持たなかつたことを寂しく思い、悲しく憶う。しかしそれだけ私は、七百年の

時代の隔りを持つにかかわらず、祖聖を真実の父と感ずることが強いのである。お、慈父！ 私はまことにあなたの子であることを嬉しく思う。

「慈父」なるが故に常に我が側に立ちたもう。
慈父なるが故に常に我が側に立ちたもう。我が至る所、何処にもあなたを見出し、悲しき時、寂しき時、嬉しき時、順逆如何なる時にも、慈父なる祖聖と一体なるを喜ぶものである。

聖誕

祖聖にとつて釈尊が、大信海より応現せる大善知識、慈父であつたように、慈父としての祖聖は又、涅槃の都より還相の大用に動かされて、大願業力によつて大信海より、我が前に君臨せられた如来応化身にいたします。あなたは如来によつて遣わされたる教主大善知識、即ち「久遠の慈父」である。

五月二十一日は祖聖降誕の聖日である。安芸の国においては特に「御誕生日」として祝福すべき日とされている。四月八日が仏教徒にとつての記念日であるように、五月二十一日は慈父が大地に肉身を受けたまいし記念すべき聖日である。天上天下唯我独尊の大聖を生みし日も尊いが、大地の愚禿を生みし日はまた、我にとつては大聖の降誕と共に忘れることの出来ない聖日である。

五月二十一日、それは実に慈父の生れたまいしよき日である。

愚禿なる慈父

あなたは、限りなく如来の本願に乗托して、真実の浄土に往相せられたる久遠の凡夫、愚禿の自覚にたちたもうた。徹頭徹尾、愚禿にてあらせられた。陰惨なる北越の雪の中に流罪にあいたまい、「たとえ法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも更に後悔すべからず候。」とまで生死一体を信知したまいし師父に別れ、寂しき曠野にたちたまいて、今更に真実の自己にさめ、現実の暗に大悲還来せる法然菩薩の本願を感じたまいしあなたは、ここに愚禿の自覚に到達せられたのである。

我等の慈父はまことに「愚禿」にいたしました。自力小我のはからいに絶望して「いづれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と自己破産を宣言し、愚禿の名によつて、真実の浄土への聖扉を開かれたのであつた。

金剛不壊の大信心海は、唯この愚禿の自覚によりてのみ開かれたのであつた。

「金剛堅固の信心の さだまる時をまちえてぞ

弥陀の心光照護して ながく生死をへだてける。」

開かれたる聖扉、現前に転廻せる願力の白道、それを悠々と浄土に愚禿の名によつて往相せられたのが慈父であつた。

還相の慈父

しかし聖人は単なる往相の人であつたであらうか。我は今、念仏の裏に聖人に会えば、聖人はすでに久遠の慈父にいたしますことを言つた。我が孤独なる人生の歩みの側に立ちたもうて常に我と共に念仏し発遣したもう慈父は往相の人ではなく、還相の

菩薩である。まことに大經の法藏菩薩の聖容をば、大地に合掌せる愚禿の上に発見し、大涅槃より還相して私等が胸に閉ざされたる自力小我の迷妄の鉄扉を開き、本願弘誓の大船に乗托せしめたもう唯一なる大聖にてまします。

単なる往相の聖者はある。光まばゆき聖者はある。されど我等が沈める無限の生死界にわけ入って水火二河の間に來り、奈落火炎の唯中に愚禿と名告って大悲同感しつつ我を救い、我を教え、我を導きたもうものはただ聖人である。

罪惡生死の巻に立つて、何等の光を持たずして限りなく久遠業苦に悲泣する者、それは我等の世界に充ちている。何等の自覺なく、唯善人なりと自惚れ、賢者なりと自認し、学者なりと主張する虚仮賢善の人は我等の世界に充ちている。しかしかかる人間群がどうして我等の前に慈父たり得よう。

聖人は限りなき無明海の底に愚禿を発見したもうた。しかも生死海底に人間親鸞を發見し、愚禿を名告り、自ら肉食妻帯を断行して、凡夫さながらの生活をなしたもうといえども、その背後には真如界より還相せる法藏菩薩の聖容を示し、さながら大願業力によつて、我等の前に、久遠の如来の穢国に化したもうを、感得せしめたもうのである。

我等は、自覺内觀の世界において、どこまでも罪惡生死の凡夫にすぎない。しかも慈父は如何なる深き生死海底に於ても、常に我等が側に立ちたもうと共に、我等が迷妄の暗き闇にとざされたる日にも、來たつてこの現実にささやき教えて、いつしか白道の上にあるよろこびを与えたもうのである。まことに久遠の慈父を通してのみ、我は彼岸の召喚の現実の上に生き得るのである。